

38:1 そのころのことであった。ユダは兄弟たちから離れて下って行き、その名をヒラというアドラム人の近くで天幕を張った。38:2 そこでユダは、あるカナン人で、その名をシュアという人の娘を見そめ、彼女をめとって彼女のところに入った。38:3 彼女はみごもり、男の子を産んだ。彼はその子をエルと名づけた。38:4 彼女はまたみごもって、男の子を産み、その子をオナンと名づけた。38:5 彼女はさらにまた男の子を産み、その子をシェラと名づけた。彼女がシェラを産んだとき、彼はケジブにいた。38:6 ユダは、その長子エルにタマルという妻を迎えた。38:7 しかしユダの長子エルは【主】を怒らせていたので、【主】は彼を殺した。38:8 それでユダはオナンに言った。「あなたは兄嫁のところに入り、義弟としての務めを果たしなさい。そしてあなたの兄のために子孫を起こすようにしなさい。」38:9 しかしオナンは、その生まれる子が自分のものとならないのを知っていたので、兄に子孫を与えないために、兄嫁のところに入ると、地に流していた。38:10 彼のしたことは【主】を怒らせたので、主は彼をも殺した。38:11 そこでユダは、嫁のタマルに、「わが子シェラが成人するまで、あなたの父の家でやもめのままでいなさい」と言った。それはシェラもまた、兄たちのように死ぬといけな思ったからである。タマルは父の家に行き、そこに住むようになった。38:12 かなり日がたって、シュアの娘であったユダの妻が死んだ。その喪が明けたとき、ユダは、羊の群れの毛を切るために、その友人でアドラム人のヒラといっしょに、ティムナへ上って行った。38:13 そのとき、タマルに、「ご覧。あなたのしゅうとが羊の毛を切るためにティムナに上って来ていますよ」と告げる者があった。38:14 それでタマルは、やもめの服を脱ぎ、ベールをかぶり、着替えをして、ティムナへの道にあるエナイムの入口にすわっていた。それはシェラが成人したのに、自分がその妻にされないのを知っていたからである。38:15 ユダは、彼女を見たとき、彼女が顔をおおっていたので遊女だと思い、38:16 道ばたの彼女のところに行き、「さあ、あなたのところに入ろう」と言った。彼はその女が自分の嫁だとは知らなかったからである。彼女は、「私のところにお入りになれば、何を私に下さいますか」と言った。38:17 彼が、「群れの中から子やぎを送ろう」と言うと、彼女は、「それを送ってくださるまで、何かおしるしを下されば」と言った。38:18 それで彼が、「しるしとして何をあげようか」と言うと、「あなたの印形とひもと、あなたが手にしている杖」と答えた。そこで彼はそれを与えて、彼女のところに入った。こうしてタマルは彼によってみごもった。38:19 彼女は立ち去って、そのベールをはずし、またやもめの服を着た。38:20 ユダは、彼女の手からしるしを取り戻そうと、アドラム人の友人に託して、子やぎを送ったが、彼はその女を見つけることができなかった。38:21 その友人は、そこの人々に尋ねて、「エナイムの道ばたにいた遊女はどこにいますか」と言うと、彼らは、「ここには遊女はいたことがない」と答えた。38:22 それで彼はユダのところに戻って来て言った。「あの女は見つかりませんでした。あそこの人たちも、ここには遊女はいたことがない、と言いました。」38:23 ユダは言った。「われわれが笑いぐさにならないために、あの女にそのまま取らせておこう。私はこのとおり、この子やぎを送ったのに、あなたがあの女を見つげなかったのだから。」38:24 約三か月して、ユダに、「あなたの嫁のタマルが売春をし、そのうえ、お聞きください、その売春によってみごもっているのです」と告げる者があった。そこでユダは言った。「あの女を引き出して、焼き殺せ。」38:25 彼女が引き出されたとき、彼女はしゅうとのとところに使いをやり、「これらの品々の持ち主によって、私はみごもったのです」と言わせた。そしてまた彼女は言った。「これらの印形とひもと杖とが、だれのものかをお調べください。」38:26 ユダはこれを見定めて言った。「あの女は私よりも正しい。私が彼女にわが子シェラを与えなかったことによるものだ。」それで彼は再び彼女を知ろうとはしなかった。38:27 彼女の出産の時になると、なんと、ふたごがその胎内にいた。38:28 出産のとき、一つの手が出て来たので、助産婦はそれをつかみ、その手に真っ赤な糸を結びつけて言った。「この子が最初に出て来たのです。」38:29 しかし、その子が手を引っ込めたとき、もうひとりの兄弟のほうが出て来た。それで彼女は、「あなたは何であなたのために割りこむのです」と言った。それでその名はペレツと呼ばれた。38:30 そのあとで、真っ赤な糸をつけたもうひとりの兄弟が出て来た。それでその名はゼラフと呼ばれた。

はじめに

数週間前から、ヨセフの人生について学ぶシリーズが始まりました。

創世記 37 章から始めましたが、37 章の最後で創世記の著者モーセは、ヨセフがポティファルというエジプトの役人に売られたと語りました。ポティファルはパロの侍従長でした。

ここから、ヨセフの話が続くだろうと期待するところですが、そうではありません。

この 38 章は、ユダとタマルの話です。

この箇所は、性と暴力に終始します。

これは一見、ヨセフの物語の間になんとか挿入されたもののように見えます。

ここで私たちは考えなければなりません。

著者は私たちに何を伝えようとしているのでしょうか。なぜこの出来事を省いて、ヨセフの話が続けなかったのでしょうか。

38 章の学びを進めていくと、その答えがわかるでしょう。この箇所にも大切な教えがあります。その内容は、ヨセフの生き方と対比することができます。

正直に言うと、38 章を省いてヨセフの人生について続けて話すほうが、私にとっても楽ですが、私よりもモーセの判断力のほうがすぐれているので、自分の考えではなくモーセの判断を信頼しなければなりません。

38 章は 3 つに分けることができます。

1. 罪に対する神の裁き (1-11 節)

a) ユダの罪、異邦人との結婚 (1-5 節)

まず、創世記 24 : 1-3 を読みましょう。

24:1 アブラハムは年を重ねて、老人になっていた。【主】は、あらゆる面でアブラハムを祝福しておられた。 24:2 そのころ、アブラハムは、自分の全財産を管理している家の最年長のしもべに、こう言った。「あなたの手を私のももの下に入れてくれ。 24:3 私はあなたに、天の神、地の神である【主】にかけて誓わせる。私がいっしょに住んでいるカナン人の娘の中から、私の息子の妻をめとってはならない。

次に、創世記 28 : 1 を読みましょう。

28:1 イサクはヤコブを呼び寄せ、彼を祝福し、そして彼に命じて言った。「カナン人の娘たちの中から妻をめとってはならない。

ユダの父ヤコブは、カナン人の女との結婚が許されていないことを知っていたはずですが。ヤコブの長男、次男、三男は罪を犯したので、四男ユダが長子の権利を持っていました。

(3 人の罪については、34 章に記されています。)

ユダは神の掟を破って、家を離れてアドラムに住みました。

そして、その地でカナン人の女と結婚し、この女との間に 3 人の息子が生まれました。

息子たちの名は、エル、オナン、シェラです。

b) エルの罪 (6 節)

ユダは、長男エルにタマルという妻を与えました。

エルは主を怒らせたので、神は彼に裁きを下され、その命を取られました。

エルが犯した罪の詳細は記されていませんが、エルが主を怒らせたことははっきりと記されています。

c) オナンの罪 (8-10 節)

ユダは困りました。家を継ぐ者がいなくなったからです。

そこでユダは次男であるオナンに言いました。ユダヤの律法では、オナンはタマルと結婚して、亡くなったエルの後継ぎをのこさなくてはならない、その子はオナンの子にはならないと告げました。

(このような結婚に関するユダヤの律法については、申命記 25 : 23-34 で読むことができます。)

オナンは、タマルが妊娠してその子がエルの後継ぎになるのが気に入りませんでした。それで、性交中に自分の精子が外に出るようにしました。オナンは、後継ぎを残すというユダヤの律法に背きました。このことを神は喜ばれなかったので、オナンの命も取り去られました。たいへんなことになりました。家系をつなぐチャンスはもうひとつしか残っていません。それは、三男のシェラによって子孫を残すことです。けれども、当時シェラはまだ子どもでした。ユダは、三男のシェラが大きくなってタマルと結婚して後継ぎを残せるようになるまで実家に帰って未亡人として暮らすようタマルに言いました。

適用

まず、異邦人との結婚というユダの罪に注目しなければなりません。ユダは、兄弟から離れてカナン人の女と結婚しました。先ほどの聖書個所で読んだとおり、神はユダの父ヤコブに、カナン人と結婚してはならないとはっきりおっしゃいました。

創世記 28 : 1-4

28:1 イサクはヤコブを呼び寄せ、彼を祝福し、そして彼に命じて言った。「カナンの娘たちの中から妻をめぐってはならない。 **28:2** さあ、立って、パダン・アラムの、おまえの母の父ベトエルの家に行き、そこで母の兄ラバンの娘たちの中から妻をめぐりなさい。 **28:3** 全能の神がおまえを祝福し、多くの子どもを与え、おまえをふえさせてくださるよう。そして、おまえが多くの民のつどいとなるように。 **28:4** 神はアブラハムの祝福を、おまえと、おまえとともにいるおまえの子孫とに授け、神がアブラハムに下された地、おまえがいま寄留しているこの地を継がせてくださるよう。」

その理由は、その個所の中に記されています。神は、アブラハムの子孫から特別な民を造ろうとしておられました。それは、この世への証となるためであり、また、この世の救い主をその民族から生むためでした。

ユダが家を離れてカナン人と結婚したことで、ふたつのことが起こりました。

- a) ユダが神の教えに逆らった。
- b) 家族に悪い宗教の影響が及ぶきっかけを作った。

このひとつめの罪は、すべてのクリスチャンへの警告となります。とくに、結婚相手を求めている若い人たちにあてはまります。

すべてのクリスチャンへの警告は、人生で重要な決断を迫られたとき、常に神の教えに従うということです。

聖書には、私たちの人生の重大な局面に関する明確な教えが詰まっています。

神のみことばに従うことを私たちが選ぶなら、神の祝福を得ると確信できます。

しかし、クリスチャンでありながら、神のみことばに背くことを選ぶなら、私たちがその決断について悔い改めるまで、そのことについては祝福を得ることができません。

ここで、わかりやすい例を挙げてお話しします。

約 35 年前のことですが、あるクリスチャンの女性がある好青年と結婚することになりました。けれども、ひとつ問題がありました。それは、青年がクリスチャンではなかったことです。女性の牧師は、結婚式の司式はできないと言いました。そのことで、女性は牧師に対して腹を立てました。牧師はこの女性に対して、次のみことばを引用したに違いありません。

コリント第二 6 : 14-18

6:14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。 **6:15** キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。 **6:16** 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。 **6:17** それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、 **6:18** わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

この箇所をはじめとする聖書のことばから、クリスチャンがノンクリスチャンと結婚することは神に喜ばれないということは明らかです。

それでも、女性はノンクリスチャンの青年と結婚しました。

当時、この女性は結婚式の司式をしてくれなかった牧師を恨みました。

しかし、何年も経って、結婚に関する決断について自分が間違っていたこと、牧師は正しかったことを聖霊に示されました。

彼女は自分の罪を悔い改め、心に神との平和をいただきました。

この女性は今もその男性と結婚していて、ふたりの成人した子どもがいます。

夫は今もクリスチャンにはなっておらず、娘たちふたりもクリスチャンになっていません。

そして、娘たちもノンクリスチャンと結婚しました。

ここから私たちが学べることは、次のとおりです。神の祝福をいただくには、神のみことばである聖書にはっきりと記された教えに従わなければなりません。

次に、ユダは家族に悪い宗教の影響が及ぶきっかけを作ってしまいました。そのことで、主を怒らせた長男エルが死ぬ結果を招きました。

子どもが幼い時期にもっとも影響力を持つのは母親です。エルの母親は、邪悪な宗教を信じるカナン人でした。

ですから、エルが主を怒らせたというのも当然の結果です。

クリスチャンの母親は、聖書の教えと自分の生き方の証によって子どもに良い影響を与えるというすばらしい機会と大きな責任をいただいています。

神のみことばによって子どもに良い影響を与えるのは、クリスチャンの親の務めです。これを真摯に受け止めないなら、子どもは他の誰かから間違った教えや世俗的な影響を受けてしまいます。

箴言 22:6 若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。

私たちは最善を尽くして、神のみことばの真理を子どもに教え、日常生活でその真理を実践しましょう。そうすれば、私たちの教えたことについて子どもたち自身が神と向き合う責任を負います。

たとえ子どもたちがキリスト教の教えを拒んだとしても、私たちが教えた真理を忘れることはないでしょう。

ですから、子どものために時間を取るよう努めるのは大事なことです。

家族で祈り、聖書を子どもたちに教えることは、子育ての欠かせない部分です。それが一番大切と言っても過言ではありません。

2. タマルの欺き (12-19 節)

この個所から、ユダの妻が死んだことがわかります。

ユダは、妻の喪に服した後、友人ヒラに会いに行くことにしました。

いっしょに飲んだり食べたりする予定だったのでしょう。

タマルは、ユダの旅について聞き、このチャンスを使ってユダをだまそうと企みました。娼婦のような格好をして、道端に座ることにしたのです。

なぜそんなことをしたのでしょうか。

その答えは、この個所に書いてあります。このとき、ユダの三男シェラはすでに成人していました。

先の 11 節で、ユダはタマルに約束をしていました。三男が大人になったらタマルと結婚して子どもを作り、家を継がせるという約束でした。

ユダは約束を守っていませんでした。それで、タマルはユダをだまし、娼婦になりすましたタマルと性的関係を持つように仕向けたのです。

タマルは、ユダの子を妊娠して、息子ができれば家を継がせられると算段しました。

タマルは悪知恵を働かせ、ユダから貴重品を預かりました。それは、彼が約束した子ヤギを必ず持ってくるようにするためです。

娼婦の間では、これはよくあることでした。

タマルはユダに、印形とひもと杖を要求しました。

これらの物はユダにとって肌身離さず持つ貴重品でした。

杖にはおそらく、彼の名前といっしょに特別な彫刻が施されていたでしょう。

印形は、日本の印鑑に相当します。

タマルは、ユダのひもも要求しました。

これは、ベルトのようなもので、ユダのために特別に手作りされたものだったはずで

さて、タマルはこれらのものを手に入れ、ユダと性的関係を持ち、すぐに身ごもりました。

この時、ユダは息子の嫁と関係を持ったことに一切気づいていませんでした。

適用

タマルとユダに関するこの個所から、私たちは何を学べるでしょう。

まず、ユダについて考えてみましょう。

ユダは、弱者である未亡人のタマルの面倒を見るという家長としての責任を果たしませんでした。

息子の嫁というタマルの権利を軽んじたのです。

しかし、タマルはユダ一家に忠実を尽くしました。

夫が死んで 20 年ほどが経っていて、タマルは他のカナン人と結婚することもできましたが、そうはしませんでした。

歴史上、カナン人の宗教では「儀式的売春」が欠かせなかったことが分かっています。

人々は、豊穡祈願の儀式として神殿娼婦と性行為をしました。

ユダが神殿娼婦と関係を持ったと思っていたことから、結婚相手の文化にどれだけ彼自身が染まっていたかが伺えます。

彼自身がカナン人になってしまっていたのです。

適用

この個所は、未信者と釣り合わないくびきをおわないようにというクリスチャンすべてに対する警告です。(コリント第二 6:14)

これは、ビジネスにも、結婚にも、その他の人間関係にも当てはまります。

神は、私たちがクリスチャンになったからといって罪の性質がなくなるわけではないことをご存じです。

私たちの心の中では、ふたつの性質が常に戦っています。

ふたつとは、聖霊と私たちの罪の性質です。
ノンクリスチャンの友人たちにはひとつの性質しかありません。
それは罪の性質です。
その人たちから受ける影響は、私たちのたましいにとって決してプラスになるものではありません。
つまり、その人たちと時間を過ごすことでクリスチャンとして成長することはないのです。
むしろ、信仰生活が後退し、ノンクリスチャンの考え方に染まってしまいます。
ノンクリスチャンと一線を画すようにという神の命令は、クリスチャンの霊を守るためのものです。
親が子どもを目に見える危険から守ろうとするように、神は神の子たちを霊的な危険から守ろうとなさいます。
神のみことばに従うことで、私たちは守られた状態でいられます。

3. 罪の罰があることを思い知る。(20-30 節)

38 章の最後の部分です。
ユダは、神殿娼婦に約束した子ヤギを友人ヒラに託して届けようとしていました。
ユダは、それで印形とひもと杖を返してもらえと思っていました。
しかし、それは返ってきませんでした。ユダがヒラに伝えた場所に娼婦がいたことはないと言われたのです。
21 節には、地元の人たちに尋ねまわり、その場所に娼婦がいたことがないとわかったとあります。
3 か月ほど経って、ユダは息子の嫁が妊娠していることを聞きました。そして、売春によって身ごもったことも聞きました。
ユダは怒って、タマルを殺してしまえと命じます。
ユダは、悩みの種であったタマルを亡き者とするチャンスを得ました。
25 節で、タマルはユダの印形とひもと杖を持ってきて、これらの品の持ち主の子を妊娠したと皆の前で言いました。
26 節で、ユダは自分の罪を白状し、タマルは自分よりも正しいと言いました。
ユダは、息子シェラをタマルの夫にして後継ぎを作ることをしなかった過ちを認めました。
ユダは罪を示されたのです。その告白は、神が彼の心に働かれた証です。

残りは、タマルがペレツとゼラフというふたごを生んだ話です。
とても興味深いことに、この長子であるペレツの家系からダビデ王が生まれ、後に救い主イエス・キリストが生まれるのです。

ユダの行動からの適用

ユダは、良い家庭に生まれました。両親は神のことを教えてくれたはずですが。
しかし、彼は家族を離れ、それまでのしつけに背を向けました。
ユダは、カナンの地で神の喜ばれない異教の文化に染まりました。
神殿娼婦や子どものいけにえは、その人々の宗教の一部でした。
ユダは自分で自分をこのような状況に追い込みましたが、神はそんな中でも彼の心に働いてくださいました。そして、ユダが自分の罪を告白したその日から、神はユダの心に働き続けてくださいました。
ここで今日私たちが学ぶべきことは、どれほど罪に溺れていても、その人が悔い改めるなら、神はその人を救うことができになるということです。
ヨセフの話の中で次にユダが登場するとき、その態度に変化が見られます。
極悪な罪人さえ、神の贖いの恵みによるなら、天国に行くことができます。
新約聖書でユダに相当するのは、ルカの福音書 15：11-32 に登場する放蕩息子です。
この物語に登場する息子は、父親の愛と守りを知りながら、自分の好き勝手な道を選び、お金を使い果たしてしまいました。
しかし、ある日その息子は、自分の過ちに気づき、罪を悔い改めます。

父親は、喜んで息子を家に迎え入れます。

父親は言いました。「この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。」（ルカ 15：24）

今日、聖書の神が自分を神の家族に受け入れてくれるだろうかと思っていますか。これまでの過ちが大きすぎて、神は自分の罪を赦してくれないと思っていますか。

神は赦してくださいます。それは、イエスのおかげです。

神はご自身の御子を天からこの世に遣わされました。それは、私たちの罪を負わせるためです。

それが、神ご自身の聖さを妥協することなく私たちを赦す唯一の方法だからです。

これは、驚くべき犠牲的行為です。神がそうなさったというのは驚きです。また、イエスが進んでこの世に来られ、神のご計画に従われたことも驚きです。

私たちにとって最大の難関は、自分の罪を認めることです。今日、神の聖霊があなたに罪を示されるかもしれません。

もしそうなったら、神に罪を告白し、イエスによって赦してくださいと願い求めれば、神の家族に迎え入れてもらえます。

タマルの行動からの適用

タマルは、三男を与えるというユダの約束を 20 年も待ったのに裏切られたかわいそうな未亡人でした。

タマルはカナン人だったのに、なぜユダの家系を守ろうとしたのでしょうか。

一言で言えば、このようなやっかいな状況の中にも神がご自身の目的を果たしておられたからです。

もちろん、義父と性的関係を持つことは間違っています。

また、タマルはユダをだまして性的関係を持つように仕向けました。

しかし、これほどめちやくちやな中でも、神はご自身の目的を果たして、満足のいく結果を生みだされました。

マタイの福音書 1 章には、イエス・キリストの系図が登場します。ここには女性は 5 人しか出てきません。その 5 人は、タマル、ラハブ、ルツ、バテ・シェバ、そしてマリヤです。

タマルは娼婦の格好をした人、ラハブは遊女、ルツは異教徒モアブ人、バテ・シェバは姦淫の罪を犯した人、マリヤは処女で妊娠した話を信じてもらえず、性的な罪を犯した者から誤解されました。

これは、救い主、主イエス・キリストの謙虚さと恵みを示します。

タマルは、家系を守るというユダヤ文化の要求になんとしても応えようとしてしました。それが最終的には、この世の罪の問題に決着をつけられる唯一のお方へとつながったのです。

黙示録 5 章で、天にいる人々が集まり、「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか」という声を聞いた時、誰も開くことのできる者がいなかったのがヨハネは泣きました。

すると、長老のひとりが言いました。

「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出た獅子、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」

人間レベルの話では、娼婦のふりをした人との恥ずべき一夜がすべての始まりです。

わが主を十字架の悩みと死にまで 追いやりまつりしわれをも顧み

救いの恵みに与らしめ給う 御神の愛こそまことの愛なれ